

環「東台湾海」文化圏における島際関係史

—与那国島を中心に—

中華民国中央研究院民族学研究所 黄 智慧

このたびお招きをいただきまして誠に光栄に思います。私は1997年から98年まで1年間琉球大学に客員研究員としてお世話になり、女性にとって人生の一大事である出産の経験も沖縄でいたしました。現在、息子は小学校4年生となっています。私にとって沖縄は研究だけではなく、個人的にもとてもご縁の深い土地でございます。

さて、今日皆様にご報告をさせていただく内容は、私の10年ほど模索し続けてきた結論として、民族学的視点から、歴史の絡み合いを含めて「東台湾海」文化圏における島々の関連性を考えていきたいと思っております。その中でも範囲が非常に広いので、与那国を中心に焦点を絞って話を進めていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

台湾では北の東シナ海や西の台湾海峡、さらに南のバシー海峡はよく知られていますが、東にある見渡す限りの大海原は、太平洋としか呼ばれなかったのです。私は1992年に初めて与那国を訪れ、その後八重山諸島、宮古諸島、さらに台湾の東海岸の離島を回りましたが、太平洋という呼び名は、台湾の東の外海における人や物の動きを的確にあらわしているのだろうか、という素朴な疑問を持ち始めるようになりました。この海域は現在なお正式な名称を持っておりません。私は1997年に執筆した論文で初めて「東台湾海」という言葉を用い始めました。その後、この海域における諸民族の交流史を描いてきました。研究のコンセプトを構築するうちにこの海域の特殊性に、名前を与えるに値すると切実に考えるようになりました。よく

よく見ればこの海域は東北アジアと東南アジアの接点でもあります。政治や経済的効果などの実用性はひとまず抜きにして、学術的にその特殊性を証明できれば、学界での対話の場を新たに切り開くことができるのではないかと思います。私の考えている「東台湾海」の海域は北緯約20度から25度まで、東経120度から126度まで、3つの島群に囲まれる海域であるという構想です。3つの諸島群とは(1)琉球諸島西南端の島群、(2)台湾島およびその東の近海にある島群、(3)ルソン海峡以北のバタン諸島・バブヤン諸島を指します(図1)。

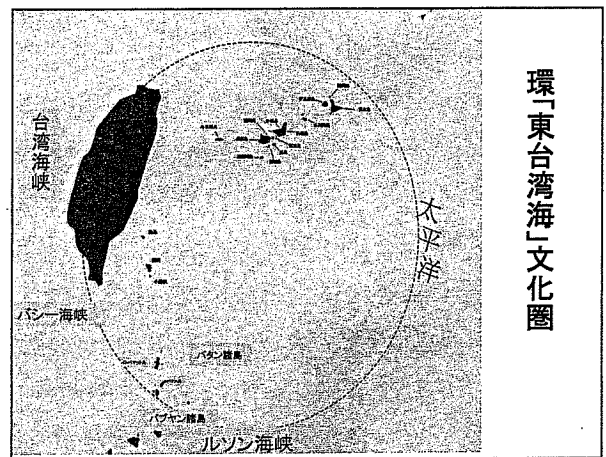


図1：環「東台湾海」文化圏

これらの諸島群に住む人々にとって、「東台湾海」の海域は非常に行き来しやすい身近な海でもあります。近代の国家体制では、3つの国家に分断されているため、お互いの交流・交渉史について国際関係の枠の中で捉えられがちですが、今日はあえて国際関係論ではなく、島際関係論を考えてみたいと思っております。

海域という概念は、人文科学からいろいろなアプローチや研究がなされてきました。歴史的

に見ると制陸権の観念は制海権よりも早く発達し、陸の地図や地名の記録は海のそれよりはるかに早く製作されました。18世紀、19世紀に入って植民主義が盛んになるにつれてイギリス、日本、アメリカなど制海権を持つ列強が相次いで勃興し、その後アジアの各海域の名称もほぼ決定されました。特にこの十数年、日本の歴史学界では海域の研究がかなり重要視されており、その中でも大きく貢献したのはネットワーク論の研究です。例えば濱下武志（以下敬称略）によると、アジアの海域は全世界の大陸周辺の海域の中でも最も複雑な海域群をなしています。これらの海域圏は歴史上、貿易のほかに政治、宗教、経済などの原理によって徐々に形成されてきました。また桜井由躬雄は海域の政治的、経済的機能からサブ海という概念を生み出し、東南アジアの海域のネットワークをさらに細分しています。

一方、考古学、民族学の方からも海に関する多数の研究蓄積がありました。特に有名なのは70年代の角川書店の賛助を受けた「黒潮文化の会」ですが、この会は自然科学、造船技術、人文科学の専門家を網羅していました。中でも考古学、民族学は戦前の台北帝国大学の研究の流れを汲んでいました。1928年に設立された台北帝大の土俗学人種学講座は日本初の民族学（文化人類学）の学科でした。講座主任の移川子之蔵をはじめ、同講座出身の馬淵東一、他に金関丈夫、鹿野忠雄、国分直一といった台湾とかかわりの深い学者は、台湾の民族学や考古学の研究を行っていたと同時に、沖縄、蘭嶼、フィリピン諸島にも注目し、優れた研究成果を残しました。台北帝大の土俗学人種学講座は戦後、国立台湾大学・考古人類学科に受け継がれましたが、私は不才ながら、その学科の卒業生にあたります。

戦後、私の職場の台湾中央研究院では、1950年代に民族学研究所の初代所長である凌純声がアジアの地中海という観念を提唱し、物質文化の伝播について研究していました。また80年代からは曹永和をはじめとする同院の歴史学者

によって元、明、清代の中国との関連の海洋史研究も盛んに行われてきました。90年代に入ってから民族学研究所が、台湾と周囲の諸民族との民族学的及び生物学的関連を、自然人類学者も入れて研究するようになりました。私はこの研究プロジェクトの一員として、台湾周辺の諸民族の中でも特に沖縄との関係を研究してまいりましたが、沖縄諸島の中で台湾に一番近い島である与那国島から研究を始める必要性を感じました。与那国島からは台湾の島の影が夏の暴風が来る直前に、年に何度か蜃気楼現象で見えることがあります。島が可視範囲にあるということは古代の人々の往来の条件でした。両者の関連性を打ち切ったのは、むしろ近代の国家権力によるものです。

このようにして、沖縄と台湾との関係は、日台双方の民族学・考古学者が常に問題意識を抱いていましたが、多くの謎に包まれています。研究を深めるにつれ、謎を解く鍵は与那国島に潜んでいるのではないかと思うようになりました。理由は以下述べてさせていただきます。

まず、与那国島には1477年の済州島農民の漂流関係史料が、沖縄の中でも最も年代的に古い文字記録が残っています。その史料を台湾からの視線で読むと、違和感なく台湾の東沿岸の民族の生活と非常に似ていることに気が付きません。与那国島と隣接している東台湾の諸民族は、北部にはケタガラン族、カヴァラン族、中部にはアミ族、サキザヤ族、南部にはプユマ族、パイワン族、ルカイ族、また東南の海上に浮かぶ

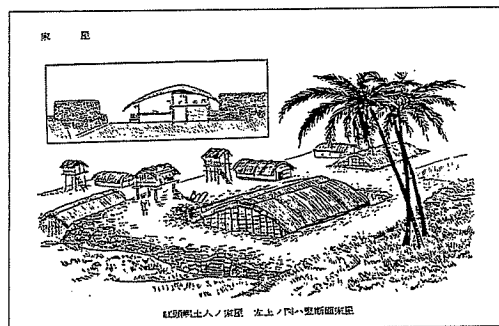


図2：19世紀末の蘭嶼島の住居様式
(出所：鳥居龍蔵『紅頭嶼土俗調査報告書』1902年)

蘭嶼という島にはヤミ（タオ）族が住んでいます。こういった民族の社会文化は、15世紀の与那国の史料に書かれている身体装飾法、生活技術、社会制度、農耕などにおいて共通項が多く見出せます。例えば当時の与那国島の女性の髪形、ピアス、首飾りは台湾東部の民族にもよく見られます。また、高床式の倉や片方が長くなっている屋根、服装などは、蘭嶼という島に行くと、今でもそのような風習、風景を見ることができます（図2）。

そして漂流史料に書かれた稲のつくり方ですが、これは20世紀初頭の東海岸のアミ族について書かれている総督府の旧慣調査記録とほとんど同じであるように見受けられました。また、与那国の史料には、稲の収穫前に人々は非常に謹んで声を出さない、というような記述がありましたが、台湾南部のルカイ族には同じような風習が今でも見られます。

次に、与那国の人類起源神話の比較研究を取り上げたいと思います。与那国には太陽所（ティダンドゥグル）という有名な起源神話があります。この神話は先島の中でも唯一残っている神話ですが、その内容は、大昔、南の島から男がやってきました。男はこの島を発見して、島には人間は住んでいなかったの、住めるかどうかというのを試みるために、ヤドカリを放ちました。数年経て、再び見に来たところ、見事に繁殖していたのを見て、今度は家族を引き連れてこの島に住み着いたという話です。そのうち人間が多くなって、いい島になりました。一方、台湾の東海岸の諸民族にも、人間が南の島からやってきたという神話が数多く記録されています。この南の島を指す「スナサイ」という各民族共通の言葉があり、スナサイ神話伝播圏を形成しています。私はこれに与那国島を入れるべきだと考えております。ほかに、波照間島には大災害の後の兄妹結婚の起源神話があります。似たようなモチーフの神話は台湾の東海岸の諸民族にも多く見られます。

次に歴史事件に関する解釈です。与那国は歴史上琉球王国において最後に征服された島

です。ほかの八重山周辺の島々に比べてなんと120年も遅かったのです。どのような理由で与那国は琉球王国の南下拡大史において最後の独立地域となったのでしょうか。15世紀前後に与那国では三度にわたる征服戦争が起こりました。1450年の西表島祖納からの征服戦争がありまして、石垣島のアカハチの乱が平定された後、1500年、宮古島からも侵攻に来ました。これにより、与那国島が初めて琉球王国の属地になりました。また1522年、鬼虎の乱を征伐するため宮古島の軍隊がやってきました。この時代の与那国の島の戦歴は先島諸島に比べても異常に多かったのです。しかし、腑に落ちないのはこの3つの戦争の原因が史料上でははっきりしないのです。ほかの島ではなく、なぜ与那国が狙われたのか、与那国のどのような特質が周りの列強に、のどから手が出るほどの思いをさせたのか、非常に興味深い問題でした。そのなどを解くために、西を向くことによって解釈の手がかりが出てくるのではないかと思います。台湾ではここ数十年、北部の淡水付近に十三行という大きな鉄鉱の遺跡が発見されました。現在、十三行博物館という考古学の博物館が現地に設けられています。大変おもしろいのは十三行系統の人々が年代が下るにつれ東の方に移動するんです。十三行の年代は1800年前まで遡れますが、その後東の方に移動し、東の宜蘭あたりでは同じ十三行系統の文化の400年前の遺跡が発見されています。鍛冶の技術を持っていた十三行の人々が、もう一歩先の与那国とどういった関係があったのか、というのは考えさせられる問題でした。資源の掌握の葛藤から、15世紀のこの地域の島々の戦争史を改めて解釈することができるのではないかと思います。

もう一つ、私が注目したのは与那国のある特殊な祭りです。この祭りはマチリと言い、村祭り、玉祭りとも呼ばれています。島のほかの年中行事とはあまり関連がなく、八重山では与那国しかないという奇妙な祭りです。与那国では昔13の有力な家が宝物を持っており、年に1日だけ宝物を出して清めて拝む風習があります。

その際、お客さまを招いて宝物を見せ、宴会をしてから再び丁重にしまっておくのです。宝物の中で特に玉が特徴的だったので玉祭りと呼ばれるようになりました。玉の形は曲玉ではなくて、小さいビーズの玉です。実際に今でもマチリの際に、頭にかぶせたり、首にかけたりして「タマハティ」と呼ばれる踊りを行います。

先島の人々の玉に対する嗜好は1477年の史料にすでに記載されています。現在の与那国島のタマハティに使われる玉の形は沖縄の中でも特例といえます。しかし、台湾の東海岸の民族とは玉の種類や形だけではなく、宗教的な意味、霊力観念、玉における権力、財産継承と交易などにおいて共通項が見出されます。また、バタン諸島の17世紀の史料にも頭の上からビーズ玉を垂らしたような女性の装飾文化が記録に残っています。さらに、装飾文化だけではなく呪術的な使い方もあるということです。

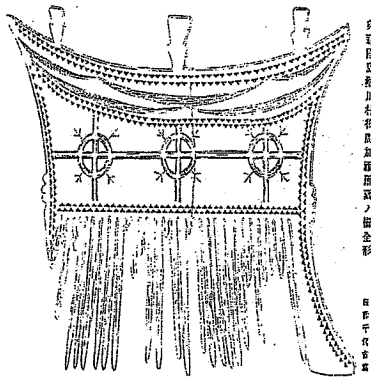


図3：探検記録に描かれた与那国の大きな木彫りの櫛
(出所：笹森儀助『南島探検』1894年)

宝物の中でもう一つ有名なのは、特殊な彫刻模様を施した大きな櫛であり、19世紀末に探検家・笹森儀助による記録があります(図3)。これによると、与那国には当時同じ形の櫛は3軒の家に5つもありました。これら玉や櫛のような宝物は、先島から北の地域ではなかなか見られないものです。しかし南に行けばどうでしょうか。まず、私は波照間島でも全く同じ形のくしを2つ見たことがあります。波照間ではすでに祭りは行われなくなり、どうしてそういうものを持っていたかということも、持ち主はわ

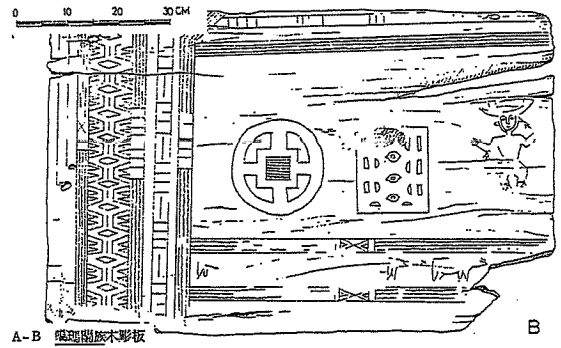


図4：台湾東部カヴァラン族の木彫りの板

(出所：王端宜「北部平埔族の木彫」『考古人類学刊』35/36号、1974年)

からなくなっていました。ただし、やはり年に1日だけは出して清めてからしまっておくという慣わしがあります。一方、模様から見れば、台湾東部のケタガラン族やカヴァラン族の19世紀末の木彫りの模様と非常に似たようなものもありました(図4)。また、家の宝物を年に一度だけ出して清めるという風習は、蘭嶼のヤミ(タオ)族にも見られます。さらに、これはメラネシアのクラ交換の風習をも想起させます。クラ交換の宝物の中には、首飾りや大きい木彫りの櫛もよく見られます。

今日は、与那国を中心に先島と台湾とのつながりについての話を進めてまいりましたが、台湾とバタン諸島とのつながりについては時間を割くことができませんでした。すでに研究者の間で蘭嶼のヤミ(タオ)族が南のバタン諸島からやってきたということは、定説になっていますので、その文化の親近性は言うまでもありません。私のかつて文献資料の整理を行ったことがあります。

「東台湾海」の周辺に住む諸民族の中で最大の民族は、台湾東部の平野地に住むアミ族です(人口約15万人)。ほかには島嶼の自然条件に制限され、規模の非常に小さい民族です。彼らは黒潮や台風、季節風など共通の生態体系と、それに呼応した共通の文化を持っています。もう一つ特徴づけられるのは、皆、無文字民族でもあります。そのため、残っている史料は漂流民、探検家、海賊、宣教師など外部の人々によって

書かれたものであり、お互い補うという形で断片的な資料を解釈することが必要です。また、3つの島群が文字記録の時代に入った時期はそれぞれ違っており、文化の発展の形も周囲の国家勢力に強く影響され、どんどん隔たりが大きくなっています。近世においては琉球王国、薩摩藩、スペイン王国が影響力を発揮していました。かろうじて台湾の東部の諸民族の方は19世紀末まで独自の文化を保つことができました。

現在、3つの島群は日本、中華民国、フィリピンという3つの国家に分属されていますが、どの国にとっても国の中心と離れた辺境地になっています。そして離島、辺境は文化的に発展することのできない悩みを抱えています。いつの日かそれぞれの文化の発展が国境によって遮断されることなく、島々の隣人関係に戻ってより自然な交流が実現されることを望んでおります。

最近の言語学や人類学の研究では、台湾がオーストロネシア語族の拡散の北の起源地だと考えられるようになりました。果たして、台湾は北限なのでしょうか。北の沖縄へは拡散しなかったのでしょうか。この問題の解明はこれからの沖縄研究に期待したいと思います。

今まで沖縄南部の先島諸島の研究は、日本本土、あるいは西の中国とのつながりが重要視されてきましたが、一步先の南の島々とのつながりをも視野に入れることによって、よりバランスのとれた沖縄像を描くことができるのではないかと思います。

財団法人海洋博覧会記念公園管理財団 30周年記念事業

海洋文化に関するシンポジウム

沖縄海人文化の系譜

報告書

編集

財団法人海洋博覧会記念公園管理財団

〒905-0206

沖縄県国頭郡本部町字石川424番地

電話 0980-48-2741

FAX 0980-48-3339

発行

財団法人海洋博覧会記念公園管理財団

理事長 富田 祐次

発行日 平成19年3月31日